価格から見た和釘から洋釘への転換

STUDY ON THE CONVERSION FROM THE JAPANESE NAIL TO THE WESTERN NAIL IN TERM OF PRICE

平山 育男^{*1}
Ikuo HIRAYAMA

This article clarified the conversion from Japanese nails to western nails in the *Meiji* era by price of these nails.

According to the price of Japanese nail in 1875 in the building documents of the *Kaiti-Gakko*, the price of western nail was about 1/28 in September 1889, about 1/34 in 1892 and about 1/50 in 1911. Also, in urban areas and rural areas there was a difference in time from Japanese nail to western nail. The reason was that there were differences in price of western nails depending on the area, which affected the conversion of western nails.

Keywords : *the Japanese nail, the Western nail, price*

和釘, 洋釘, 価格

1. はじめに

近世に流通した和釘が、近代に入り洋釘に置き換わったことは歴史的な事実として広く認識され、その転換時期は安田善三郎の『釘』によれば

和釘と洋釘との交代は無論都鄙に依りて遅速有りますが、概して、明治二十年ころから、三十年ころの間にあつたやうに思われます^{注1)}

とあり、明治 20 (1887) から明治 30 (1897) 年頃とする記載が一般には周知されている。

ところで、筆者らは和釘から洋釘への転換にはやや幅をもった移行期間が存在したこと既に示している。つまり、明治 10 (1877) 年代後半が和釘から洋釘への移行期間で、この時期において日本で建築が行われた建物では、住宅、社寺建築、洋風建築など、その種類を問わず、和釘と洋釘が併用されたことをこれまでに示している^{注2)}。

このように和釘から洋釘への転換は、広範な歴史的な事実として受け入れられ、建築年代を判定する際の編年にもしばしば用いられている。しかし、その一方で和釘から洋釘への転換を促した背景の解明が進んでいるとは言い難い。和釘から洋釘への転換期において、安田善三郎は以下に示すように様々な問題があったことを『釘』において指摘している^{注3)}。

或る一種の物を使ひ慣れて居ります処へ、新に之に代るべき

ものを出して、見せましても、新しき物の方は、未だ使用の経験が無いだけに、疑懼^{ぎこ}の念が先に立ち新たに危険を冒して経験の時日を費すよりは、従来経験の有つた方を安心して使用するの優れるを思ひ、新しきものには、兎角批難を加へ勝ちなものであります、洋釘の渡り始めなども、矢張此の範囲に漏れず、種々の批難を免れませんでした。

い、釘は其茎四角なればこそ、利きが好きなれ、然るを、洋釘のやうに、茎が円くては、十分に利く筈無く、日ならずして脱け出す恐れ有らう。

ろ、釘の茎は、其尖より頭まで、錐体になつて居ればこそ、楔の理に因て好く物体に刺さるゝなれ、然るを、洋釘の茎のやうに、端が尖るだけで其の他が同じ太さでは、其の長さの割には、効力が有るまい。

は、洋釘の茎は、錐体を成して居ない為めに、之を打ち込む時に、無理を生じ、従つて曲り易い。

に、洋釘は、和釘に比すれば錆易く、黒いしみを生じて、体裁上見にくい、などの批難が有りました、で、大工中には、之を用ひるのを罪惡のやうに思ふ者もあり、殊に建築主は、不安心なこの釘を用ひるのを甚く好まず、洋釘を用ひざるを、請負契約書中の一条件とする人さへ有りました、が、洋釘は、第一其価^{あたい}が甚しく安く其形体上から言へば、蓋に鉄槌^{かしろ}の滑り止めが有る

^{*1} 長岡造形大学造形学部 教授・博士(工学)、博士(造形)

Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr.Eng., Dr.Design

ために、打ち込む時に曲るといふ杞憂も無く、頸にぎざゝの刻みが有るために、脱け出でもせず、和釘に比して稍長みのものを使へば、さしたる劣点の無いことが、追々知れて来まして、終に、全く和釘に代り、和釘の株を奪ふやうにまりました。

安田によれば和釘から洋釘への転換期、洋釘に対しては形態的な問題、錆易いのではという原料に根差した問題が指摘されたが、洋釘は“価が甚しく安く”、指摘の点についても問題はなく、和釘は洋釘に転換したとする。つまり、和釘から洋釘への転換については形態的、材質的な問題が表面化したものの、これらの問題は克服され、結果として極めて安価な洋釘が普及したとする。

ところで、洋釘が和釘に対してどの程度安価であったのか、『釘』を通読しても前掲した“価が甚しく安く”との記載に留まるのみである。加えて『釘』の記載に留まらず、従来は和釘と洋釘の価格の時代的な差異を具体的な数値として示した報告は未見である。

そこで、本稿では価格の観点から和釘と洋釘の比較を行い、洋釘が普及した背景の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 従来の資料に見る和釘と洋釘の価格とその問題点

2-1 従来明らかにされている釘の価格を示す資料

近代初期からの釘の価格については数々の報告が経済史の観点から既にあり、金融研究会による資料①『我国商品相場統計表』^{注4)}、朝日新聞社による資料②『日本経済統計総観』^{注5)}、日本銀行統計局による資料③『明治以降本邦主要経済統計』^{注6)}、大川一司らによる資料④『長期経済統計 8 物価』^{注7)}、農商務省統計課資料⑤『物価表』^{注8)}などが挙げられる^{注9)}ものの、これらは多く東京の情報が中心で、後掲する掲載期間、釘の種類、単位価格などにおいて問題があり、価格の判明する和釘との比較に用いることは難しい。

これらに対し、宮本又次らが近世以来の連続性を重視し、大阪の資料に基づいてまとめた以下の資料は有用である。

資料⑥：大阪大学物価史研究会 宮本又次ほか：近世大阪の物価と利子^{注10)}

資料⑦：大阪大学物価史研究会 宮本又次ほか：明治期大阪卸売物価資料(4) (以下、『物価資料(4)』)^{注11)}、(11)^{注12)}

資料⑥は、天保元(1830)年から明治 12(1879)年の 50 年に渡る大阪における諸品の価格調査に基づくもので、44 品目について明治 13(1880)年に大阪商法会議所から事務局へ報告され、この中に釘についての項目がある^{注13)}。釘の価格についての報告は

釘商今西佐兵衛所有ノ帳簿ニ就テ查出ス釘ハ地金ト異ナリテ月々相場ニ高値アルモノニアラス或ハ2年或ハ34年間モ同価ナル事アリ故ニ今其変換セ氏時ノ価ノミヲ記ス其品ハ則チ播州及ヒ備後ノ製ナリ^{注14)}

として、釘商今西佐兵衛所有の帳簿に基づき、天保元(1830)年から明治 12(1879)年における“釘大 5 寸”と“釘並 4 寸”について 1000 本の価格が示される^{注15)}。

資料⑦『物価資料(4)』は明治時代における大阪の物価について『大阪商法会月次報告』などの資料に基づいてまとめたものである^{注16)}。この内、洋釘は『大阪商法会月次報告』と『大阪商業会議所物価表』により、1 吋半、2 吋半、4 吋の 100 斤について明治 25(1892)年 1 月から明治 44(1911)年 12 月までの記載がある^{注17)}。

2-2 従来明らかにされている釘の価格を示す資料の問題点

但し、資料⑥、資料⑦においても、以下のような問題を指摘できる。

・年代

資料⑥における掲載期間は天保元(1830)年から明治 12(1879)年、資料⑦『物価資料(4)』は明治 25(1892)年 1 月から明治 44(1911)年のため、特に和釘から洋釘の転換時期となった明治 10(1877)年代後半から明治 20(1887)年代における記載について欠如がある。

・釘の種類

釘の資料を見る場合、重大な問題の 1 つは釘の種類を精査し、和釘-洋釘とも同等のものを比較せねばならない点にある。『釘』を通覧しても、多種類の和釘、洋釘が存在したことを知ることができる。

和釘の場合、呼称を“4 寸”とする釘だけを見ても、『釘』においては享和 3(1803)年における本途帳の記載として、平釘類^{注18)}、頭巻釘類^{注19)}ではこの長さを“二寸八分より三寸まで”とする。なお、同書では名称による呼称長と実長との差異を、予め設けられた流通余地とする^{注20)}。また、『釘』では明治 10(1877)年頃における磐城国三春町付近における角釘の名称及び大小として“四寸(正三寸二分)”との記載も示す^{注21)}。更に、『釘』において建築用の角釘とする欄を見ると、呼称長を“四寸”とする製品の実長に当たる“長”は“一寸二分”とある^{注22)}。つまり、この場合、4 寸とする呼称長の角釘では、実長と 2 倍以上の開きのあることが分かる。

また。著者は明治時代における開智学校の建築資料の内、特に釘の価格について既に検討している^{注23)}。この資料では明治 8(1875)年の建築資料では、和釘に“本四寸釘”とする記載がある。資料ではこの釘について具体的な長さを記さないが、この釘の用途について“蛇腹、入口、フチ、窓枠、瓦棧天井ツリ木用”^{注24)}とあるため、この和釘は実長を 4 寸とするより、『釘』にある角釘の“四寸”、則ち実長 1.2 寸程度のものと考えることができる。

一方、洋釘も資料⑦においては 3 種類が報告されているが、実際には長さでは $\frac{1}{2}$ インチから 7 インチまで 20 種類程を示す^{注25)}。

このように和釘は呼称長に対して様々な実長の製品があり、精緻に実長を判断する必要がある。そのため、資料⑥に記される情報だけで和釘の正確な寸法を知ることとはできず、細かく検討を加えた上で、和釘と洋釘で同等の長さとなる製品を比較検討する必要がある。

・釘の長さの単位

輸入時、洋釘の呼称長は一般に“吋”の単位で示された。但し、卸販売の場合、東京など関東では“吋”を“寸”に換算した呼称長であったのに対し、関西では“吋”による呼称長であった^{注26)}。

つまり、和釘と洋釘を比較する場合、洋釘の呼称長も正確に把握する必要があることになる。因みに資料⑦『物価資料(4)』における洋釘の呼称長は、関西における“吋”と判断できる。

・釘の価格単位

和釘は価格単位が多く本数に対してであるのに対し、洋釘は資料⑦『物価資料(4)』で示されるように、重量に対してが多い。そのため、価格を比較する場合、重量と本数の関係を把握する必要がある。

2-3 問題の所在

以上より、和釘と洋釘の価格を比較する場合、先ずは和釘と洋釘の長さを慎重に検討する必要がある。和釘は、呼称長からその長さを知ることとはできないことが多く、洋釘においても呼称長に関東では“寸”、関西では“吋”を用いたため、和釘と洋釘相互で長さの対応する製品を比較する必要がある。また、釘の価格は、和釘が単位

本数に対してであるのに対し、洋釘は単位重量に対して示す場合が一般的で、この換算が必要である。

つまり、上掲した資料⑥における和釘の“釘並4寸”と、資料⑦『物価資料(4)』における洋釘の1 吋半、2吋半、4吋とするものでは、資料の記載だけで釘の種類を比較することはできない。また、資料⑥では和釘の単位本数を1000本、資料⑦『物価資料(4)』では洋釘の単位重量に100斤を用いるため、この換算も必要となる。なお、単位の斤についてはイギリスの1ポンド(=453.6g)に基づく場合と、日本における尺貫法の160匁(=600g)に基づく場合があり^{注27)}、その判断も必要である。更に、年月の離れた価格を比較する場合、この間における物価変動も考慮せねばならない。

即ち、和釘と洋釘の価格を比較考察する際には、和釘と洋釘の長さを検討し、価格表示に用いられる単位を考慮した上で同一の単位価格の下で比較検討を行い、その上で物価変動の調整を行うという、やや煩瑣な手続きが必要となる。

3. 資料に見る明治時代における和釘と洋釘の価格

以上のように、和釘と洋釘の価格を比較する場合、慎重な検討が求められ、かつ和釘、洋釘ともその種類が判明する資料の選定が必要で資料としては限られたものとなる。そのため、以下に掲げる資料は、少ない点数ではあるが、上記の条件を満たすと考える。

以下では、各資料の資料紹介を行い、代表的な釘の価格を検討する。なお、この成果から『物価資料(4)』に示される洋釘の価格についても援用ができるかの判断が可能になると考える。

3-1 明治8(1885)年 開智学校の建築資料

開智学校における建築資料としては、“明治八年四月二十一日ヨリ”の年紀を持つ『開智学校新築仕様帳』と、年紀を欠くものの、類似の内容で同名の『開智学校新築仕様帳』が存在する。ここでは先行する公刊書の記載により、前者を『開智学校新築仕様帳 明治八年』(以下、『仕様帳 明治八年』)^{注28)}、後者を『開智学校新築仕様帳〈明治〉』^{注29)}として、本稿では確実な年紀を有する『仕様帳 明治八年』を中心に資料として用いることとする。

『仕様帳 明治八年』は、表紙に
開智学校新築仕様帳 北深志町八番丁 立石清重 明治八年四月二十一日ヨリ
との記載があるため、明治8(1885)年4月から立石清重により、開智学校新築の仕様帳として作成されたことは明らかである。体裁は見積が中心で、本文文頭には

開智学校新築御入用金
一金七千百拾円四拾二線老厘
とあり、以下に大工方、鍛冶方、瓦方、壁方、石方、塗師方、畳方、人足方、材木方、買入物方の見積を記す。この内、鍛冶方の記載中に地鉄頭巻三寸釘を含む9種類の和釘と鋸についての用途、単価、員数、見積額が記載される。以下、ここに記載される和釘9種類について、和釘の呼称、主要な用途、100本当たりの単価を示す。なお、下掲の記載は、原資料を単価の高い順に整理し直した。

大六寸釘	台輪	1.00円
本五寸釘	地覆、台輪、階子	0.65円
本四寸釘	蛇腹、窓枠、瓦棧、天井吊木	0.30円
頭巻大三寸釘	床板	0.15円

本三寸釘	垂木、蛇腹、天井板、屋根、傘棚	0.117円
七寸釘	裏板、荒床、削床板	0.035円
六寸釘	張天井板、腰板	0.028円
頭三寸釘	貫鼻隠、腰板、流板	0.008円
大八釘	木摺、木舞	0.006円

この見積において、資料を通覧する限り洋釘は用いられず、見積は総て和釘によるものであることが分かる^{注30)}。つまり、時代的にみてこの価格は和釘が流通した最晩年のものと位置づけることができ、その面でも重要である。

なお、既に述べたように“本四寸釘”と呼称される釘は、用途から考え、『釘』における建築用角釘の“四寸”に該当し、この釘の実長は“一寸二分”と考える。

3-2 明治43(1910)年1月 『梅本商報』における洋釘の価格

・明治43(1910)年1月 『梅本商報』の紹介

次いで、時代はやや離れるが明治時代末期における資料を見ておきたい。資料は大阪の梅本商店により発行された『梅本商報』である。梅本商店は大阪でも早くから洋釘を扱った商店の1つ^{注31)}で、明治43(1910)年1月1日における『梅本商報』による洋釘の価格が以下のように示される(Fig. 1)^{注32)}。

●洋釘 和百斤入 老樽ニ付		
吋	寸	
イ 七五	(六分)	八円五錢
ロ 一〇	(八分)	八円五錢
ハ 一二五	(寸)	七円四十五錢
ニ 一半	(寸二)	七円三十錢
ホ 一七五	(寸四)	七円十五錢
ヘ 二〇	(寸六)	六円五十五錢
ト 二半	(二寸)	六円二十錢
チ 三〇	(二四)	六円
リ 三半	(二八)	五円八十錢
ヌ 四〇	(三二)	五円八十五錢
ル 四半	(三六)	五円七十五錢
ヲ 五〇	(四寸)	六円十五錢
ワ 六〇	(四八)	五円八十錢
カ 七〇	(五六)	七円
。 八吋	(六四)	七円
。 十吋	(八寸)	八円五十錢

『梅本商報』で洋釘は1行目に割注で“和百斤入老樽ニ付”とあるため、日本の尺貫法に基づく100斤(=60kg)を単位重量として示し

日一月一年三十四百西														
十	八	七	六	五	四	三	二	一	七	六	五	四	三	二
吋	吋	〇	〇	〇	半	〇	半	〇	半	〇	半	〇	半	〇
五	八	七	七	五	六	五	五	五	六	六	七	七	八	八
圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
五	十	八	十	五	五	五	八	十	二	十	五	十	五	五
錢	圓	圓	錢	錢	錢	錢	錢	圓	錢	錢	錢	錢	錢	錢

Fig.1 “UMEMOTO-SYOHU” 1910.1.1
『梅本商報』 明治43(1910)年1月1日

たことが判明する。また、資料では洋釘の呼称長“吋”に対応する呼称長“寸”^{注33)}、和100斤あたりの価格を提示する。

・明治43(1910)年1月 『梅本商報』における価格の比較検討

明治43(1910)年1月 『梅本商報』における洋釘の価格と、明治8(1885)年の開智学校『仕様帳 明治八年』における和釘の価格を比較したい。

明治8(1885)年の開智学校における『仕様帳 明治八年』で例示した実長が1.2寸となる和釘“本四寸釘”は、『梅本商報』において“一半”吋で“寸二”に対応すると考えることができる^{注34)}。洋釘では、この“一半”吋が最も需用のある製品でもあった^{注35)}ため、この長さの和釘と洋釘について、価格の比較を以下では行いたい。

『梅本商報』に記される洋釘で呼称長“一半”吋のものは、和100斤当たりの価格が7.30円とされる。ここでの問題は既述のように和釘が本数当たりの価格を示すのに対し、洋釘は重量当たりの価格を示すため、換算が必要となる点である。この問題については年代順では明治39(1906)年刊の『簡易洋風建築術 上 説明』が呼称長1.2寸の洋釘1000本の重さを280匁^{注36)}、明治43(1910)年刊の『金属重量表』は26匁^{注37)}、大正5(1916)年刊行の『釘』は27匁とする^{注38)}。そのため、これらの平均27匁を採用すると、1匁＝3.75gのため、27匁＝101.25g＝0.10125kgである。つまり、洋釘“一半”吋の100本当たりの重量は、27匁＝0.10125kgとなる。一方、和100斤＝60kgのため

$$60\text{kg} : 7.30\text{円} = 0.10125\text{kg} : x\text{円}$$

とする比例式が成り立ち、これから洋釘“一半”吋100本当たりの価格は0.012円^{注39)}と求まる。

更に、物価の変動による調整を、卸売物価指数によって補正したい。和釘の価格が判明する開智学校における資料を用いるため、明治8(1875)年の卸売物価指数0.289と、該当する明治43(1910)年の卸売物価指数0.588を用いて価格を修正すると^{注40)}、上掲した明治43(1910)年の洋釘“一半”吋100本当たりの価格0.012円は、明治8(1875)年当時の物価に換算すると0.006円となる。

即ち、明治8(1885)年の段階で100本当たり0.3円であった呼称長“本四寸釘”の和釘に、明治43(1910)年1月の段階では呼称長“一半”吋の洋釘が対応し、この100本当たりの価格は明治8(1885)年当時の物価に換算し0.006円となり、価格はおよそ1/50にまで下落した、とすることができるわけである。

3-3 『明治期大阪卸売物価資料(4)』

次いで明治43(1910)年1月付『梅本商報』にある洋釘の価格を、『物価資料(4)』における釘の価格と比較して、両資料間の関係を把握しておきたい。

『梅本商報』において呼称長“一半”吋とされた洋釘は、『物価資料(4)』において“1吋半”とするものに該当すると考えると、『物価資料(4)』で明治43(1910)年 1月における“1吋半”の価格は上、中、下旬及びその平均価格とも100斤当たり7.35円とする^{注41)}。この価格は『梅本商報』に記載される7.30円に対して100.1%の価格で、両者は極めて近似し、両者は同一の種類の洋釘に対し、同一の単位重量に基づいた価格を示しているとすることができる。

つまり、この結果より、『物価資料(4)』における洋釘の価格は和100斤当たりのもので、この資料によって明治25(1892)年から明治44(1912)年に及ぶ洋釘の価格を概観できることになる。そこで、『物価資料(4)』に記される価格の内、洋釘1吋半について各年平均の価

Table 1 The price of the one-and-a-half Western nail in “*Meijiki-Osaka-Orosiuri-bukka-siryō* (4)”

『明治期大阪卸売物価資料(4)』における1吋半の洋釘の価格

Meiji	A.D.	1.5in./60kg price[¥]	1.5in./100nail price[¥]	Wholesale price coefficient in 1885 conversion[¥]	Percentage of the Japanese nail price in 1885	
		1吋半/100斤 価格[円]	1吋半/100本 価格[円]	明治8(1885) 年卸売物価指 数に換算した 価格[円]	devimal fraction	fraction
					明治8(1885)年における和釘 の価格に対する割合	
					少数	分数
Meiji 25	1892	5.57	0.009	0.009	0.029	1/34
Meiji 26	1893	6.21	0.010	0.009	0.032	1/31
Meiji 27	1894	7.08	0.012	0.010	0.034	1/29
Meiji 28	1895	6.63	0.011	0.009	0.030	1/33
Meiji 29	1896	6.76	0.011	0.008	0.028	1/36
Meiji 30	1897	6.79	0.011	0.008	0.026	1/38
Meiji 31	1898	6.84	0.012	0.007	0.024	1/42
Meiji 32	1899	7.86	0.013	0.008	0.028	1/36
Meiji 33	1900	8.96	0.015	0.009	0.030	1/33
Meiji 34	1901	7.44	0.013	0.008	0.026	1/38
Meiji 35	1902	6.82	0.012	0.007	0.023	1/43
Meiji 36	1903	6.25	0.011	0.006	0.020	1/50
Meiji 37	1904	6.90	0.012	0.006	0.021	1/48
Meiji 38	1905	7.75	0.013	0.007	0.022	1/45
Meiji 39	1906	8.19	0.014	0.007	0.023	1/43
Meiji 40	1907	8.58	0.014	0.007	0.022	1/45
Meiji 41	1908	8.00	0.014	0.006	0.021	1/48
Meiji 42	1909	7.91	0.013	0.007	0.022	1/45
Meiji 43	1910	7.49	0.013	0.006	0.021	1/48
Meiji 44	1911	7.64	0.013	0.006	0.020	1/50

格を求め、100本当たりに換算した価格、明治8(1885)年当時の卸売物価指数をもとに換算した価格、明治8(1885)年の和釘に対する割合を少数と分数により示したものがTable 1となる^{注42)}。

これによると明治25(1892)年から明治44(1911)に及ぶ20年間に、呼称長1吋半の洋釘の価格は、明治8(1885)年の物価に換算して100本当たり0.009円から0.006円になったことになる。そして、呼称長1吋半の洋釘の価格は、これに対応する呼称長“本四寸釘”の和釘の価格に対し、この期間、高下の変動はあるものの0.034(≒1/29)から0.020(≒1/50)へ推移したことが分かる。

3-4 明治 22(1889)年 9 月 20 日付『中外物価新報』

・明治22(1889)年9月20日付『中外物価新報』における記事の紹介
明治22(1889)年9月20日付『中外物価新報』では、“鉄釘騰貴の勢あり”とする記事、以下に示す釘の相場が記載される。なお、この記載は『物価資料(4)』に示される期間を遡る点、貴重である。

目下東京鉄商の売買取引相場は和百斤に付概ね左の如くなりと云へり

七分	七円七十銭	二寸	五円十銭
八分	七円廿銭	二寸四分	四円六十銭
一寸	五円九十銭	二寸八分	四円四十銭
一寸二分	六円二十銭	三寸二分	四円十銭
一寸四分	五円四十銭	三寸六分	四円廿五銭
一寸六分	五円廿五銭	四寸	
		四寸八分	四円三十銭 ^{注43)}

この記事から、明治22(1889)年9月下旬当時の東京における和100斤当たりとなる洋釘の相場を知ることができる。なお、洋釘の呼称長は関東における“寸”による表示となる。

・明治22(1889)年9月20日付『中外物価新報』における洋釘価格の検討
ここでは、前掲した資料と同様、明治8(1885)年の和釘“本四寸釘”に対応する洋釘“一寸二分”の価格について比較を行いたい。計算

は前述のものと同様のため詳細は省略するが、明治22(1889)年9月下旬当時、和100斤当たり洋釘“一寸二分”は6.20円のため、100本当たりの価格は0.011円となる。これを更に明治8(1875)年の卸売物価指数0.289と明治22(1889)年の卸売物価指数0.300に基づき修正すると、明治22(1889)年9月下旬における0.011円は0.011円と修正される。

つまり、明治8(1885)年に100本当たり0.3円であった和釘に対し、明治22(1889)年9月に対応する長さの洋釘100本当たりの価格は明治8(1885)年当時の物価に換算すると0.011円で、価格は約1/28となる。

3-5 明治27(1894)年2月15日付 美濃国関本町すみや茂十郎『広告』

・明治27(1894)年2月15日 美濃国関本町すみや茂十郎『広告』の紹介

これは著者が所蔵する明治27(1894)年2月15日付の美濃国関本町すみや茂十郎『広告』(以下、すみや『広告』)で、Fig. 2に示した。

広告

今般名古屋市岡谷鉄店ト特約ノ上洋釘類非常安売可仕候ニ付テハ二月現金直段左ニ

百目ニ付		百目ニ付	
六分	六錢參厘	寸六	四錢壹厘
八分	六錢壹厘	二寸	四錢三厘
壹寸	五錢四厘	二四	三錢八厘
寸二	五錢一厘	三二	三錢四厘
寸四	五 錢	三六	三錢四厘

右申上候間多少共御用奉願上候

美濃国関本町

明治廿七年
二月十五日

すみや茂十郎

関活版印刷所

この広告における洋釘の呼称長は“寸”に換算した関東のもので、洋釘を100目 (=100匁=375g) に対しての価格を示す。

・明治27(1894)年2月15日付 美濃国関本町すみや茂十郎『広告』における洋釘価格の検討

この資料についても、明治8(1885)年の和釘“本四寸釘”に対応する洋釘の価格を比較したい。なお、この広告で“寸二”とされる製品が、1吋半の実長を持つ洋釘と考える。

つまり、明治27(1894)年2月当時、関では100目 (=100匁=0.375kg) 当たり洋釘“寸二”は“五錢一厘”、即ち0.051円となる。これも前

Fig.2 The Advertisement of SUMIYA, M. AT SEKI-HONMATEI OF MINO-KOKU, 1894. 2/15

明治27(1894)年2月15日付 美濃国関本町すみや茂十郎『広告』

掲の計算式に則れば、“寸二”釘100本当たりの価格は0.014円となる。そして、明治8(1875)年の卸売物価指数0.289と明治27(1884)年の卸売物価指数0.338によってこの価格を修正すると、明治27(1894)年2月の0.014円は明治8(1875)年当時の0.012円と換算される。

即ち、明治8(1885)年に100本当たり0.3円であった和釘に対し、明治27(1894)年2月の関において対応する長さの洋釘は、100本当たり明治8(1885)年当時の物価に換算して0.012円となり、明治8(1885)年の和釘に対する価格は約1/25とすることができる。

なお、この明治27(1894)年2月の関における価格と、同時期における『物価資料(4)』における価格と比較をして、これが適正か確認しておきたい。『物価資料(4)』において明治27(1894)年2月における洋釘1吋半の価格は7.30円^{注44)}のため、これを100本当たりの価格に換算すると0.012円となる。つまり、すみや『広告』に示される明治27(1894)年2月の関における0.014円は、大阪における価格の1.1倍である。価格としてやや割高ではあるが、これはすみや『広告』にもあるように、同店は名古屋の岡谷鉄店^{注45)}を経由して関において特約店としての販売であるため、価格の1割が経費として割増されたと考えられる。なお、『釘』においては先述のように

和釘と洋釘との交代は無論都鄙に依りて遅速有ります^{注46)}

として都会と地方では和釘と洋釘の転換に遅速のあること示す記載を見ることができるが、地域における転換時期の差異は、物流のあり方に基づき、上掲のような価格も作用したとみることができる。

4. さいごに

明治時代における和釘から洋釘への転換について、価格の観点から考察を加えたが、明らかとなるのは以下の諸点である。

- 1) 開智学校の建築資料より明治8(1875)年における和釘の価格が明らかとなり、和釘の並四寸の場合、100本で0.30円であった。なお、この並四寸の実長は『釘』の記載より1.2寸と判断できる。
- 2) 明治43(1910)年1月付『梅本商報』より、この当時の洋釘の価格が明らかとなる。この資料によれば、和釘の実長1.2寸に対応するのは洋釘1吋半とすることができる。なお、この洋釘1吋半の価格は卸売物価指数に基づく物価の影響を修正して比較すると、明治8(1875)年の和釘に対して1/50程となる。
- 3) 明治43(1910)年1月付『梅本商報』における釘の価格と比較することで、『物価資料(4)』に記される洋釘の価格は、1斤=600gの和斤として示されると判断できる。また、この対応より明治25(1892)年から明治44(1911)年における洋釘価格の変動を概観することが可能となり、この間、洋釘は明治8(1875)年の和釘に対しておよそ1/29から1/50程の価格で推移したことを確認できる。
- 4) 明治22(1889)年9月20日付『中外物価新報』における釘の相場は、『物価資料(4)』を遡る資料として貴重である。この段階で洋釘の価格は明治8(1875)年の和釘に対して約1/28程であった。
- 5) 明治27(1894)年2月15日付 美濃国関本町すみや茂十郎『広告』による洋釘の価格は『物価資料(4)』に準拠するが、1割増となる。つまり、すみやの価格には特約店の経費が含まれると考えられる。

以上の考察から、明治時代において和釘から洋釘に転換した状況を、和釘と洋釘について価格の観点からその一端を明示することができたと考える。つまり本稿では、従来、和釘が洋釘へ置き換わっ

た理由について、単に洋釘は和釘に対して“価が甚しく安く”との指摘に留まった点を、実際の数値として示すことができた。

即ち、諸資料から明治8(1875)年における和釘の価格に対して、これに対応する長さの洋釘は明治時代を通じて下落し、明治22(1889)年9月の時点では1/28程、明治25(1892)年では1/34程、明治44(1911)年には1/50程にまでなったことを示した。

また、『釘』においては、都会と地方では和釘から洋釘への転換時期には差異のあったことを記載するが、この点についても地域により洋釘の価格に差異が見られ、これが和釘から洋釘の転換時期にも影響を及ぼした可能性を指摘した。

参考文献

- 1) YASUDA, Z.: *KUGI*, 1916.12(in Japanese)
安田善三郎:釘, 1916.12
- 2) YAATOKOUGOYUKABUSIKIGAISSYA: 50NENSI, 1952.9(in Japanese)
大和工業株式会社:五十年史, 1952.9
- 3) HIRAYAMA, I., KIMURA, T., MIFUNE, T., UMEJIMA. O., NISIZAWA. K.,:STUDY IN THE BUILDINGS USED THE JAPANESE NAIL AND THE WESTERN NAIL TOGETHER, AIJ Journal of Technology and Design, Vol.22. No.51 pp.767-770, 2016.6(in Japanese)
平山, 木村勉, 御船達雄, 梅嶋修, 西澤哉子:和釘と洋釘を併用する建物, 日本建築学会技術報告集, 51, pp. 767-770, 2016.6
- 4) HIRAYAMA, I., STUDY ON THE USE AND THE PRICE OF THE NAIL TO WATCH IN THE ARCHITECTURAL DOCUMENTS OF THE KAITI-GAKKO, Nagaoka Institute of Design Bulletin 15, pp.65-70, 2018.3(in Japanese)
平山:開智学校の建築資料に見る釘の使用と値段, 長岡造形大学紀, 15, pp.65-70, 2018.3

注

- 注1) 参考文献1) 121頁。以下、本稿で『釘』とは本書を示す。
- 注2) 参考文献3)
- 注3) 参考文献1) 122～124頁。漢字の一部に原文にある読み仮名を振った。また、改行の方法は原文によった。
- 注4) 財団法人金融研究会:我国商品相場統計表、昭和12(1937).11。同書Sでは309頁に、“洋釘”1樽[16貫]建、長2寸について、明治23(1890)年平均値、明治25(1892)～昭和12(1937)年の最低、最高、平均値が示される。但し、釘の種類は2寸に限られる。
- 注5) 朝日新聞社:日本経済統計総観、昭和5(1930).5。同書では1113～1128頁の各表に洋釘の項目を設けるが、具体的な種類は示されない。
- 注6) 日本銀行統計局:明治以降本邦主要経済統計、昭和41(1966).7。同書に釘についての価格の変遷を示す記載はない。
- 注7) 大川一司ほか:長期経済統計8、物価、昭和42(1967).9。同書では200頁で“品目別工業製品価格指数”とする表に“洋釘”の項目を掲載するが、これは1901～1915年のもので、釘の種類は示されない。
- 注8) 農商務大臣官房統計課:物価表、大正9(1920).3。同書では明治33(1900)年以後の記載に留まる。
- 注9) 既往の研究は、大阪大学物価史研究会:明治期大阪卸売物価資料(1)、大阪経済学29-1、143頁、昭和54(1979).6、などによる。
- 注10) 大阪大学物価史研究会 宮本又次ほか:近世大阪の物価と利子、昭和38(1963).8
- 注11) 大阪大学物価史研究会:明治期大阪卸売物価資料(4)、大阪経済学30-1、120～191頁、昭和55(1980).6
- 注12) 大阪大学物価史研究会:明治期大阪卸売物価資料(11)、大阪経済学33-3・4、144～173頁、昭和59(1984).3。なお、これは、明治期大阪卸売物価資料(4)において得られた成果を明治33(1900)年を基準年として品目別価格指数としたもの。
- 注13) 大阪大学物価史研究会 宮本又次ほか:近世大阪の物価と利子、106頁、前掲。なお、記載によれば当初は48品目について報告の予定が、4品目については未調査で、その結果44品目の報告に留まったとある。
- 注14) 大阪大学物価史研究会 宮本又次ほか:近世大阪の物価と利子、111頁、前掲
- 注15) 大阪大学物価史研究会 宮本又次ほか:近世大阪の物価と利子、335頁
- 注16) 大阪大学物価史研究会:明治期大阪卸売物価資料(1)、大阪経済学29-1、

- 140～143頁、前掲
- 注17) 大阪大学物価史研究会:洋釘[1]、明治期大阪卸売物価資料(4)、大阪経済学30-1、166～172頁、前掲。なお、172頁には“洋釘[2]”として明治45(1912)年1月から5月における2時半の洋釘、100斤あたりの価格が示される。但し、この表では2時半のみの価格を記すため対象とはしない。
- 注18) 参考文献1) 54頁
- 注19) 参考文献1) 56頁
- 注20) 参考文献1) 53頁
- 注21) 参考文献1) 58～59頁
- 注22) 参考文献1) 65～66頁
- 注23) 参考文献3)
- 注24) 松本市:史料開智学校6、35頁、平成7(1995).2
- 注25) 参考文献2) 348頁
- 注26) 参考文献2) 345頁。原文では関東を“東筋”、関西を“西筋”とする。
- 注27) 飯田朝子:数え方の辞典、341頁、平成16(2004).4
- 注28) 松本市:史料開智学校6、35頁、前掲
- 注29) 松本市:史料開智学校6、337頁、前掲。なお、この資料を、松本市教育委員会:重要文化財旧開智学校本館移転修理工事報告書、21頁、昭和40(1965).3、では『明治8年立石清重提出の開智学校新築仕様帳』として紹介す。
- 注30) 松本市:史料開智学校6、36頁、前掲、の鍛冶方における項目では“鎮中舶来二寸五歩丁番”、“鉄ノ西洋三寸五歩み丁番”、“白玉舶来面打箱錠”などの記載があるため、金具類の一部は輸入品による見積と判断できる。
- 注31) 梅本二郎:釘とともに歩んだ120年、19～23頁、平成元(1989).10
- 注32) 梅本二郎:釘とともに歩んだ120年、33頁、前掲
- 注33) 参考文献2) 345頁と対応させると、“吋”が関西系、“寸”が関東系の呼称長と対応する。
- 注34) 参考文献2) 345頁“普通丸釘の呼称”では、西筋における略書“吋半”に対応する寸に換算した東筋の略称は“一二(一寸二分)”で、これに対応する“大工の略称を当てて見れば”、“四寸”という。“大工の略称を当てて見れば”とは和釘実長に基づく呼称長の対応を示すと考えられる。
- 注35) 参考文献2) 338～339頁によれば、昭和13(1938)年まで洋釘取引の単位は、東京(関東)が“〇三五組合せ”で計500樽、大阪と神戸(関西)が“デラー組合せ”で計100樽が需用の組合せで決まっていた。そして、“デラー組合せ”で“一半”吋と“二〇”吋は最も多い14樽、“〇三五組合せ”では最も多い86樽であった。また、参考文献2) 338～339頁によれば、昭和戦前期の資料の動向とはなるが、第2次大戦中の統制下で行われた需用調査で、“一半”吋が全体の18%を占め、割合は最も高い。
- 注36) 信友堂:簡易洋風建築術 上 説明、52頁、明治39(1906).10
- 注37) 梅岡正吉商店:金属重量表、32頁、明治43(1910).5
- 注38) 参考文献1) 114～115頁
- 注39) 以下、本文における価格の表示では少数点以下4桁を四捨五入した。そのため、各表示間では数値の整合しない場合がある。
- 注40) 以下、卸売物価指数はいずれも、日本銀行百年史編纂委員会:日本銀行百年史 資料編、434～439頁、昭和61(1986).9、掲載の“物価関連指標”の記載に従った。この指標には卸売物価指数、消費者物価指数、東京小売物価指数、輸入物価指数、米価、地価、GNPデフレーターの記事があるが、明治元(1868)年以後の指数があり、物価全般の趨勢を示すものとして卸売物価指数を用いた。なお、卸売物価指数はいずれも昭和9～11(1934～36)年平均を1として示される。
- 注41) 大阪大学物価史研究会:明治期大阪卸売物価資料(4)、大阪経済学30-1、171頁、前掲
- 注42) Table 1では各値を計算後、1時半/100本価格、明治8(1885)年卸売物価指数による換算、明治8(1885)年の和釘に対する価格の割合の少数表示、については少数点以下4桁を四捨五入、明治8(1885)年の和釘に対する価格の分数表示では少数点以下を四捨五入した数値を表示とした。そのため、同一年における表示間のみの計算では数値の適合しない場合がある。
- 注43) 商況社:中外物価新報、明治22(1889).9/20、1頁
- 注44) 大阪大学物価史研究会:明治期大阪卸売物価資料(4)、大阪経済学30-1、166頁、前掲
- 注45) 岡谷鋼機株式会社社史編纂委員会:岡谷鋼機社史、65～67頁、平成6(1994).10、によれば、同社は明治21(1888)年9月から鉄店を設け、鉄材の販売を開始したとする。
- 注46) 参考文献1) 121頁

STUDY ON THE CONVERSION FROM THE JAPANESE NAIL TO THE WESTERN NAIL IN TERM OF PRICE

Ikuo HIRAYAMA *¹

*¹ Prof., Faculty of Design, Nagaoka Institute of Design, Dr.Eng., Dr.Design

This article examined conversion from Japanese nail to Western nail in the *Meiji* Era from the viewpoint of price. The following points were clarified.

From the building documents of the *Kaiti-Gakko*, the price of Japanese nails in 1875 became clear, and in the case of *nami-4-sun* Japanese nail, it was 0.30 *yen* in 100 pieces. The actual length of this *nami-4-sun* size can be judged to be 1.2-*sun* from the description of "*Kugi*".

By "*Umemoto-Syoho*" in January 1910, the price of western nail at that time becomes clear. According to this article, it was 1.5-inch western nail that corresponds to the real length 1.2-*sun* Japanese nail. And the price of this western nail 1.5-inch was about 1/50 of the Japanese nail of 1875 when it corrected the influence of price based on the Wholesale price coefficient. By comparing with the market price of "*Umemoto-Syoho*" in January 1910, it can be judged that the price of western nails in "*Meijiki-Osaka-Orosiuri-Buttka-Siryō*" (4) was indicated by 1-*kin* of Japan. Moreover, from this result, it was possible to overview the change in Western nail price from 1892 to 1911. During this time, western nails fluctuated at the price of about 1/29 to 1/50 against Japanese nails in 1875.

The Nail Market of the "*Tyugai-Bukka-Sinpo*" dated September 20, 1889 is valuable as a source of "*Meijiki-Osaka-Orosiuri-Buttka-Siryō*"(4). According to this article, at that time the price of western nails was about 1/28 of the price of Japanese nails in 1875.

By "*Koukoku*" of *Sumiya. S. Seki-Honmati, Mino*, February 15, 1894, we can know the price of western nail. This price was in compliance with "*Meijiki-Osaka-Orosiuri-Buttka-Siryō*"(4), but it was increased by 10%. In other words, the price of *Sumiya* was considered to include expenses as a dealer.

(2018年7月9日原稿受理, 2018年11月20日採用決定)